

公益財団法人 樫の芽会 御中

伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】	①作成日	令和6年 5月26日	
②法人・団体名	一般社団法人えんがお		
③所在地	〒 栃木県大田原市山の手 1-9-10		324-0051
④責任者氏名	濱野将行	(役職名等)	代表理事
⑤担当者氏名	濱野将行	(役職名等)	代表理事

【奨学活動の概要】

⑥助成交付決定番号	R05-030	⑦助成金額	71万円	⑧申請カテゴリ	D
⑨奨学活動名	中高生が他世代と関わりながら学習し、成長する地域の居場所づくり				
⑩主な実施場所	栃木県大田原市山の手地区				

⑪活動内容とその成果の概要（詳細は【様式3-2】又は別添資料にて記載・説明ください。）

本活動では、以下の3つを課題として捉えた。

①つながりが希薄な世帯、経済的に困難を抱える世帯の学習支援が社会に不足している。当法人でも行ってはいるが、支援者数の関係上小規模となっている。

②障害特性のある子どもも多く関わっており、タブレットなどを活用した学習を実施したいが機材が不足している。

③学習面だけではなく、進学・卒業には相談対応や伴走支援が重要である。

実施した活動は、障がい特性のある子にも対応できるよう専門職を配置した週2回の学習支援と家族の面談対応、タブレットを活用した特性に合った学習機会の提供、進学のための面接練習や書類作成のサポートである。成果の概要をまとめる。

・学習支援：2023年7月～2024年3月 週2回、年末年始の休みを除き継続して行った。毎回3名～10名の学生が参加した。集中力が持たない学生や、勉強を避けてしまう者もいたが、個別ケースごとに本人のもつ特性や得意不得意をスタッフ間のミーティングで共有し、都度対応することができた。タブレットの活用については、概ね数回で紙に戻ることが多かった。集中が切れたタイミングでタブレットを活用した学習に切り替えることで、集中が長続きすることも多く、紙媒体での学習との併用によって最も効果を発揮した。

⑫奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式3-2等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 (A：人)	平均時間 (B：時間)	活動量 (A x B)	備考・補足
中学生等	286	2	572	
高校生等	224	2	448	
大学生等	218	4	872	
学習支援員等	47	4	188	
その他				
合 計			2080	

⑬その他の定量的な数値（任意）

令和5年度 伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：

法人・団体名：一般社団法人えんがお

作成者 氏名：濱野将行

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

本事業は、以下のものを課題として捉えた。

①つながりが希薄な世帯、経済的に困難を抱える世帯の学習支援が社会に不足している。当法人でも行ってはいるが、支援者数の関係上小規模となっている。

②障害特性のある子どもも多く関わっており、タブレットなどを活用した学習を実施したいが機材が不足している。

③学習面だけでなく、進学・卒業には相談対応や伴走支援が重要である。

こうした課題に対し実施した活動は

- ・障がい特性のある子にも対応できるよう専門職を配置した週2回の学習支援と家族の面談対応
- ・タブレットを活用した特性に合った学習機会の提供
- ・進学のための面接練習や書類作成のサポートである。

実施内容の詳細と成果をまとめる。

・学習支援：2023年7月～2024年3月 週2回、月曜日と金曜日に年末年始の休みを除き継続して行った。休みの分は別日に振替して行い、助成期間中（3月を除く）63回実施することができた。参加者は毎回3名～10名で、中学生と高校生の割合は概ね半々であった。その他、助成対象ではないが小学生も2-3名の参加があった。

学習支援に対しては、大学生のボランティアと有休のスタッフの2-3名体制でサポートした。集中力が持たない学生や勉強を避けてしまう者もいたが、個別ケースごとに本人のもつ特性や得意不得意をスタッフ間のミーティングで共有し、都度対応することができた。多動傾向の学生への声掛けのコツや、自閉傾向の学生に対しての勉強をする意味の伝え方などについては、本助成で得られた専門的知識を持つアドバイザーのアドバイスを受けることで都度学びながら対応することができた。学習支援員として現場に入るスタッフやボランティアにとっては、わからないまま対応しなくてはいけない、という状況がストレスであるとのことで、「関わり方がわからなかったら聞ける体制が安心する」などのような声が聞かれた。学習支援全体では、これまで行ってきた活動の「規模の拡大」と「専門性の向上及び学習支援スタッフの活動環境の質の向上」が得られたと考えられる。具体的な例を「4.本活動におけるエピソード」にまとめる。

タブレットの活用については、当事業の対象者は概ね数回で紙媒体の学習に戻ることが多かった。集中が切れたタイミングでタブレットを活用した学習に切り替えることで、集中が長続きすることも多く、紙媒体での学習との併用によって最も効果を発揮した。また、大学生ボランティアスタッフが本人の興味に適した教材やアプリをネット上で探し、タブレットでそれを提供することでより個別性の高い支援ができた。

保護者を交えた進路相談・面談練習などの進学支援は5名に対して9回実施した。結果、通信制高校への進学検討中1名、通信制高校の転学2名、推薦入試による私立大学への進学1名であった。特に不登校生に関しては、保護者も学生も学校への相談に難しさを感じている人もおり、今後の必要性を実感した。また、進学した後に「馴染めない」「辞めなくなった」「いけなくなった」などの声を上げる学生もおり、進学支援の後の切れ目のない相談体制が課題であると感じた。

その他、今回は学習支援に特化したのが、関わっている学生と接している中で「社会体験の貧困」が如実にあることを実感した。さまざまな社会体験が積める機会の提供を学習支援と並行していくことで、机上の知識ではなく生きていくための知識になる、とスタッフ間で結論を出し、社会体験についても可能な範囲で提供を行なっていった。

2. 実施した奨学活動の詳細

・参加人数については、様式3-1と同様のものを添付します。

支援対象	延べ人数 (A : 人)	平均時間 (B : 時間)	活動量 (A x B)	備考・補足
中学生等	286	2	572	
高校生等	224	2	448	
大学生等	218	4	872	
学習支援員	47	4	188	
その他				
合 計			2080	

・協力者、周知方法

大田原市のスクールソーシャルワーカー（馬籠清貴氏）、教育委員会、大田原市保育課、NPO法人子どもの育ちを応援する会などの方々と連携し、学習支援が必要と思われる学生に対して存在の周知を行った。団体の特性上、新規の学習支援要望者よりもボランティアとして地域に関わりたい学生が多く集まる傾向にあった。2024年3月には、馬籠氏とともに市内の不登校生の現状について話し合いの場を設置し、今後の方向性についても検討した。

・地域活動について

学習支援にきている学生やボランティアとして関わりたい希望する学生と共に、地域のお祭りの手伝いやイベントのサポートを行った。具体的には「屋台祭り（伝統的な城下町の祭り）」「ピアガーデンの設営・撤収・射的の運営」、その他ハロウィンやクリスマス会などを行った。毎回5-10名の参加が見られ、地域の方々との交流があった。

・学生ボランティアについて

主に地元の大学生を中心に、以下の学生が学習支援に携わってくれた。（大学院生）山岸亮太（大学3年生）角田隼也、氏家きらり、鈴木千夏（大学2年生）斎藤凜

・専門職のアドバイザー活用について

本助成金を活用し、専門職（作業療法士）の仲田海人氏に定期的に支援方法について相談する時間や、学生との面談の時間を得た。特に精神疾患を抱える高校生の進路相談や学習支援について、また発達障害を抱える中学生の支援方法について、自閉傾向の高校生との関わりについて、有力なアドバイスを得た。

・活動の様子について、写真を添付します。



おばあちゃんと勉強



地域サロンで学習の風景



グループ学習

3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

本事業では、助成金を得たおかげで数名に絞っていた学習支援の規模を拡大し、10名程度まで受け入れが可能になった。また、学習支援を入り口として地域のボランティア活動につながった者もあり、学生にとって社会とつながるきっかけを多く作ることができた。

既存の学習支援に加え、専門職の配置や専門性の高い相談相手の確保を行い、より個別生に特化した学習支援を行うことができた。単に「やらなければいけない」という画一的な指導ではなく、障害特性を理解した上での声掛けや支援を行える学習支援を作ることができたように思う。

こうした活動を行わせていただき、大きく2つの課題が見えた。①学習支援と並行した社会体験活動の必要性②進学後の切れ目のない相談支援体制、である。

①は前述の通り、学習支援と並行して行うことが重要であり、当法人ではその部分が十分ではない。継続助成として申請させていただき、R6年度にはこの課題を受けて学習支援と社会体験活動を両方とも実施して行きたい。②進学後に、学校に馴染めず不登校になったり、別の学校に転校を希望する学生が年末付近に2名みられた。進学の相談だけではなく、その後に学校に通う中で出た悩みをいつでも相談できる体制が必要なのだと感じた。こちらも、R6年度の継続助成にて体制を整えつつ、R7年度以降には法人として寄付金なども活用しながら継続していつでも相談できる状態を整えて行きたい。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

学習支援に参加している高校生で、集中力を維持することが難しく、座っている状態を10分以上維持するのも困難な学生がいる。一方で学習支援の日にはほぼ毎回参加し、勉強しようとする意欲はみられる。

このまま（集中ができない、勉強ができない）だと将来が不安という思いと、やろうと思っても集中力が維持されない自信の状態に対しての苛立ちなども見られ、ヒアリングの際にはそのような気持ちもよく聞かれる。

医学の側面も非常に重要な状態であり、学習支援のスタッフができることは限界があるため、ミーティングでもよく議題に上がっていた。本助成金で得た専門家のアドバイスやスタッフの介入により、「不安をしっかりヒアリングすること」と「本人の感情にそって勉強の必要性を伝えていく」が大まかな方針として決まった。根本的な解決ができるわけではないが、専門性のある方針がしっかり立てられたことで、学習支援のスタッフも迷いなく関わっているように思う。本人は今も継続して学習支援に来てくれている。今後も進路などの相談にのりながら、その後も含めて継続して関わっていく。

また、本人だけではなく保護者とも密にやりとりし、保護者の悩みや家庭での状態のヒアリングも進めた。専門家のアドバイスも保護者に伝え、面で本人と関わることができている。

調子が悪い状態でも、必ずほぼ毎日来てくれているため、スタッフ一同彼の思いに応えられるようにこれからも関わっていきたい。

また、本事業の対象ではないが、小学生のお子さんと「学校に行きたいがいけない」と話す子がいた。専門家のアドバイスの中で、他の高校生に「成果を見える化すると、モチベーションになりやすい」というものがあり、それを小学生にも生かす形で、学校に行けた日にスタッフが絵を描くカレンダーを制作した。本人の目標が週に2回で、行けたらスタッフが絵を描く。それが週に2つずつ貯まることを可視化したことで、学校に行くモチベーションと、行かなかった時の絵がたまらないことの実感によって、週に2回ほぼ安定して通学ができるようになった。